

災害の経験を次に活かす

誰でも災害に遭いたくはありませんが、もしも災害に遭ったなら、その災害で学んだことを次に活かしたいものです。四国各地の例をご紹介します。

■大火の経験を活かした防火活動（徳島県徳島市）

文政7年（1824）12月12日卯刻前（午前6時頃）に徳島の新町で発生した火災は、烈しい北西風によって市街の中心地である東新町、大工町、富田町など広い範囲に燃え広がり、江戸時代の阿波国の火災で最大の被害をもたらしました。弘化元年（1844）10月5日晚4ッ前（午後10時頃）にも西船場付近から火災が発生しましたが、この時には20年前の新町の大火の教訓が活かされ、延焼を用心して遠方の人々も駆けつけて防火活動を行い、鎮火させることができました。元木氏記録には「御家中数百人欠付防仕候、内町中不残用心手当仕候、（中略）新町大火の節遠方は落付居申候為不覚を取候事有之に付、此度は用心仕候、六日朝七ッ時一丁切にて鎮火成申候」と記されています。（「徳島県警察史」1965年）

■大雪の経験を活かしたアーケード建設（香川県高松市）

昭和43年（1968）2月15日、高松市内では積雪のために配電線が切れ、1万戸以上の家庭が停電し、兵庫町・片原町商店街のアーケードが倒壊しました。警察は両町の通行を禁止し、消防署員や消防団員は徹夜で負傷者の救出や警戒に当たりました。昭和44年（1969）3月12日にも、前年を上回る大雪となり、商店街3箇所（所）のアーケードが倒壊しました。さらに昭和59年（1984）1月31日にも降雪があり、農作物や林業などの被害額は8億7,000万円に達しましたが、15年前の教訓を活かして建設された市内商店街のアーケードは、この雪では被害を受けませんでした。（「高松百年史 下巻」1989年）

■水害の経験を活かした水防対策（愛媛県西条市）

中山川では、左岸の氷見村太兵衛新田の堤防が度々決壊しました。天明6年（1786）、天明8年（1788）、寛政11年（1799）にも、大水により太兵衛新田の堤防が切れて、隣接する今在家村、広江村で被害が発生しました。このため、広江村庄屋久米弥介は、天保10年（1839）に氷見村の大庄屋高橋政実と相図って、中山川左岸に堤を築きました。また、小松藩では、水害予防のために毎年破損の憂いのある箇所を藩費で修繕するとともに、今在家、広江、北条新田の各村には普段から小舟を常備させ、非常の時には最寄りの村で炊き出しを行い、被災地に送るよう命じるなど対策を講じていました。（「東予市誌」1987年）

■津波の経験を後世に伝える取り組み（高知県土佐市）

昭和21年（1946）12月21日、南海地震が発生し、土佐市内では宇佐を中心に死者・行方不明3人、負傷58人、家屋倒壊151戸、家屋流出341戸などの大きな被害が出ました。宇佐は壊滅状態でしたが、県内の他町に比べて死者が少なかったことが特徴でした。これは、先人が津波の経験から得た教訓を残し、それを後世の人々が大切にしてきた結果でもあります。宇佐萩谷にある安政地震（1854年）の碑には「昔宝永の変にも油断の者夥敷流死の由今度もその遺談を信じ取あえず山手へ逃登る者皆恙なく衣食等調度し又は狼狽して船にのりなどせるは流死の数を免れず」などと記されています。（「土佐市史」1978年）

災害の経験を通して、人は生き抜くための術を学び、より安全で安心な世の中を築くための努力をしてきました。災害の歴史は、人が災害と闘ってきた歴史であるとも言えます。